

再構成 天安門事件

東体制においても、毛沢東自身がいくたびか挑戦してついに捕捉しきれないでいる中国社会の茫洋とした柔構造とその密教性を示し出

た。だが、それ以上にこの事件は、今日の毛沢東体制においても、毛沢東自身がいくたびか挑戦してついに捕捉しきれないでいる中国社会の茫洋とした柔構造とその密教性を示し出

もたより、今回の事件は、今日の中国社会の内部に渦巻くさまざまな潮流が、清明節を期して、故周恩来総理をしのぶという一点で

もたより、今回の事件は、今日の中国社会の内部に渦巻くさまざまな潮流が、清明節を期して、故周恩来総理をしのぶという一点で

この七律は、事件当日、天安門広場に氾濫したこれら詩文のなかの一部にすぎないが、この詩に見られるように、周恩来礼讃は同時に姚文元、江青ら毛沢東側近への激しい批判を含んでいたのであった。つねに国家的使命に立脚して公のための政治に粉骨砕身しつつ天下国家に殉じた感のある周恩来への敬慕

この七律は、事件当日、天安門広場に氾濫したこれら詩文のなかの一部にすぎないが、この詩に見られるように、周恩来礼讃は同時に姚文元、江青ら毛沢東側近への激しい批判を含んでいたのであった。つねに国家的使命に立脚して公のための政治に粉骨砕身しつつ天下国家に殉じた感のある周恩来への敬慕



四月四日、清明節の日、天安門広場に人々が集って来た (WPL)

再構成 天安門事件

中 嶋 嶺 雄
なか じま みねお
(東京外国語大学助教授・中国研究)

「マルクス主義の道理はいろいろあるが、つきつめていえば次の一句につきる。それは『謀叛には道理がある(造反有理)』ということだ」
——毛沢東

「公民は、言論、通信、出版、集会、結社、デモ、示威、ストライキの自由を有する」
——中華人民共和国憲法第二十八条

「敬愛する周総理、われわれは日夜あなたのことを想っています」
——事件当日、周恩來の巨大な遺影に書きこえられていた言葉

「冷眼蓬雀翻妖風
熱血一腔染江流」
——広場に張られた七律の詩より

I すりかえられた本質

周恩来に次いで朱徳総司令も逝った。朱徳にたいしては、あえて政治の潮流に棹さすことをせずともいい、中国革命を担った最長老として、毛沢東政治の最後の帰趨をじっと見届けてほしい、というのが中国の無告の民の声ではなかったか。いずれにせよ、中国が毛沢東以後の時代へ向けて急ピッチで移行しつつあるとき、

去る四月初旬の清明節に北京で起った天安門事件は、あまりにも多くの意味を含んだ驚天動地の重大な出来事であった。毛沢東中国の「聖地」で起ったこの大規模な「大衆反乱」は、それをいかに理由づけようとも、中国社会の基底に存在する毛沢東政治への根強い批判の潮流を改めて確認させずにはおかなかった。

た。だが、この事件が、中国共産党中央のい

したものであった。そして同時に中国の歴代王朝末期の症候にも類似した一連の事態は、文明の農業性に基づく悠久の伝統世界・中国の不易の性格を曝け出したものであったようにも思われる。この中国社会の根の深さに比したとき、あるいは社会主義もマルクス・レーニン主義も、そして「毛沢東思想」それ自身も、それらはいずれもイデオロギー的な外皮としてしか機能していないのかもしれない。

●「大衆反乱」が鎮圧された後に

中国共産党中央は天安門事件を急遽そしてもっぱら鄧小平批判と結びつけることによつて、この事件の深い根を当面の路線闘争にすりかえて説明せざるを得なかった。だが、はたして事件の性格は「走資派」の「反革命陰謀事件」だとして単純に描き出せるようなものであったのかどうか。実際、事件当日、鄧小平擁護のスローガンはほとんど皆無であつたことによつても、この事件の基本構造は、別のところに存在していたことは明白である。

大きく台流し、収斂したのであったが、このような流れは反面で、今日の毛沢東政治を担っているいわゆる文革派Ⅱ毛沢東側近への痛烈な批判、つまり「反文化大革命」となつてほとぼりしたのであった。

冒頭に引用した七言律の一部「冷眼蓬雀翻妖風、熱血一腔染江流」は、毛沢東が「大躍進」政策をめぐるか彭徳懐と天下分け目の論戦をおこなつた一九五九年の廬山会議を前にして読んだ有名な詩「廬山に登る」のなかの一節「冷眼向洋看世界、熱風吹雨灑江天」を借用し、それをもじつたものであり、その大意は「冷やかに眼を、淫らなイデオロギーたちが妖しい風を吹きちらすを。再革命の熱血はほとぼり、長江の流れを染めん」となる。姚文元および江青批判であることはいうまでもない。

この七律は、事件当日、天安門広場に氾濫したこれら詩文のなかの一部にすぎないが、この詩に見られるように、周恩来礼讃は同時に姚文元、江青ら毛沢東側近への激しい批判を含んでいたのであった。つねに国家的使命に立脚して公のための政治に粉骨砕身しつつ天下国家に殉じた感のある周恩来への敬慕

の情がつのればつものほど、それとは対照的に毛沢東家長体制の内部で政治を「私物化」していると大衆が感じている姚文元や江青への批判が激発したものとと思われる。つまり文化大革命対反文化大革命、「毛沢東の中国」対「周恩来の中国」の対立構造こそ、様々要素が複雑にからんだ今回の事件の基本構造であったが、党中央は、このような基本構造を決して明白に容認することはできなかったのである。

ひとたび「大衆反乱」が激発してからは、やがて、そこに待ち受けていたものは、徹底的な鎮圧でしかなかった。「造反有理」とか「集会、結社、デモ、示威、ストライキの自由」という憲法の規定は、「毛沢東思想」を護持し、毛沢東体制を擁護するという範囲内のみで有効であるにすぎない。華国鋒の総理昇格、鄧小平解任という事件翌々日の党中央の決定が出てからは、それを支持する官製デモや各部門各級の決議も出揃ったが、このような事件の処理によって残されたものは、再び屈折した政治不信と脱政治化傾向ないしは一種の「しらけ」ムードであったように見受けられる。

は、大慶油田「鋼鉄ドリル工」、英全清の論文「階級闘争は消滅したことがない」(『紅旗』七六年第五号)自身も、「工業は大慶に学べ」のモデル地区・大慶においても、この間、不穏な情勢があったことを認めている。

わが国では一方で、訪申した大学教授などによって文革の新生事物による中国社会の壮大な発展という報告がしばしば伝えられるが、しかし、中国各地の情勢は決して安定したものではないように思われる。河南省、広東省、雲南省、河北省、浙江省、江西省などでも政情不安が深化しつつあるとの報告もある。この七月二十日からは外国人留学生の国内旅行に関する規制が実施されたが、中国当局者はその理由を「中国では現在、階級闘争がおこなわれており、皆さんの安全を考慮しなければならぬからである」と説明している(七月二十二日北京発AFP時事)。

そうしたなかで、七月十四日、新華社が福州軍区司令の皮定鈞の死を「七月七日上午に殉職」として報じたことは、死後一週間を経過して異例の「殉職」という発表であったばかりか、七月初旬以来、福建省で頻繁に軍の移動がおこなわれていたことを衛星その他に

そうしたなかで五月中旬の外電は天安門事件の指導者が大衆裁判にかけられたのち、すでに二人もしくは三人が銃殺刑を執行され、さらに何人かが三十年の強制労働刑に処せられた旨を伝えた。銃殺された一人は、かつて文革期に「造反外交」の花形として活躍し、のちに極左分子として失脚した姚登山・前インドネシア大使の子息であるともいう。

また、六月十三日北京発ロイター電は、逮捕された騒乱参加者が大衆集会で、いわゆる「ジェット機」姿で糾弾された様子を伝えていた。他の情報は、事件発生以来、北京衛戍部隊および工人民兵によって逮捕された「反革命分子」は三千六百余人のほり、そのなかには外交部副部長・馬文波の子息、天津市党委第一書記・解学恭の子息など、軍および國務院高級幹部の子女二十数名が含まれていたという。

●だが不透明状況はつづく……

こうした情況のなかで中国は、いま、毛沢東以後への歴史的移行期を進みつつある。すでに実質的には毛沢東以後の時代が始まるようになっていることについては、六月十五日に毛沢東が今後、外国要人と会見しないことを党

中央の決定として中国外交当局が伝えたことによつていよいよ明瞭になった。

また、たとえ去る五月十六日に文革期のいわゆる五・一六(八通知)十周年を記念して出された約五年ぶりの『人民日報』『紅旗』『解放軍報』三紙誌共同社説「文化大革命は永遠に光を放つ」が、あえて、「われわれは弁証法を信じている。われわれは『新陳代謝は宇宙における普遍的な、永遠にさからうことのできない法則である』(『矛盾論』)と確信している」と述べたことによつても、中国の指導者たちがいまひしひしと問題の重要性を意識していることを示している。

だが、このような重要な時期に、毛沢東の死がもたらすであろう衝撃と変動を計量しがたいほど、大きな不安と不透明な政治的・社会的雰囲気の中に今日の中国はある。そのような不透明な状況のなかで、天安門事件以後も、四月二十九日午後には北京極左派不満分子の仕業と思えるソ連大使館前爆発事件が起り、五月十三日夜の北京駅付近の火災事件、五月二十二日付UPI電が伝えた四月初旬以来の大慶油田における「爆発事件」なども伝えられた。大慶油田の「事件」について

きよう。

それだけに、われわれは天安門事件の真実を再構成し、そこから多くの問題点を抽出せねばならないが、そのためにはやはり、天安門事件にいたる中国の社会的政治的状況をふりかえってみなければならぬ。

II 流言蜚語と「階級闘争」

●昨年七、八、九月に

文化大革命以来の十年余をとってみただけでも、中国の民衆は、すでにきわめて厳しい政治的訓練を経てきている。いわゆる「階級闘争」の名のもとに相次いだ党内闘争の帰趨とその含意を見抜くだけの政治技術と方向感覚を、彼らは十分にそなえているはずである。だが、今日のような政治体制のもとで、

こうした試練に日夜さらされていくだけに、ひとたび社会の風潮がその底流において変化する兆が見えはじめると、その変化を加速させる方向へ人心は大きく揺れ動くのではない。

一連の「走資派」批判のなかで明らかにした重要な事実として、「走資派」が「まず昨

年の七、八、九月の三ヵ月に、彼らは政治的なデマを飛ばし、大量の反革命世論を形成した」(『人民日報』四月十八日社説「天安門広場事件はなにを物語っているか」)といわれていることがある。このような「政治的なデマ」がいかに大きな意味をもつたかについては、最近、様々な言及がある。

「昨年七、八、九月の三ヵ月間、彼らは到るところで党中央を攻撃し分裂させるような政治的な流言をまき散らし、さかんに反革命的世論づくりをやった。そしてこの反革命的世論製造会社の総支配人は、ほかでもなく、党内最大の悔い改めない走資派・鄧小平なのであった」(梁劭「鄧小平と天安門広場の反革命事件」、『人民日報』四月二十八日)

「昨年七、八、九月の三ヶ月間に、右からの巻きかえしの風潮をおこし、さまざまな奇怪な論調を発表して、文化大革命やこの革命運動のなかで誕生した新生事物を否定し、白黒を転倒させ、国内情勢が『今は昔に及ばな』』などと非難した」(辛紀「中国で進められてる修正主義路線に反対する闘い」、『人民中国』一九七六年六月号)。

また、文革派の機関誌と見なしている上海の『学習と批判』最新号(一九七六年第六号)の紅宣論文「鄧小平の反革命輿論攻勢について」も、こうした「政治的デマ」によって、中国の輿論がいかに大きく動かされたかを教えている。これらの論調は、「周総理遺書」や「中央首長の談話」など、外部世界でも話題を呼んだ文件が、この間、中国内部でも流布されたことを認め、それらはいずれも悪質な「政治的デマ」だとされている。

ここに見られるような流言蜚語ないしは「街頭消息」の世界が今日の中国の現実なのであり、そうした状況のなかで鄧小平らは「全党、全国の各分野における活動の総綱を論ず」、「工業発展を早めるうえでの若干の問題について(二十カ条)」、「科学院活動報告大

最後に「わが国を近代的な社会主義の強国に築きあげるため」に奮闘すべきことを強調して、まさに「悔い改めない走資派」の立場から周恩来の生涯を総括し、同時に周恩来路線の継承を固く内外に誓ったに等しかったのである。

この事実、誰もが来るべき毛沢東の死の模様を想起せざるを得ない場面であっただけに、文革派のリーダーたちを大いに刺戟し、苛立たせ、その将来に強い危惧を抱かせたにちがいない。いわゆる文革派は、急速、鄧小平打倒への布陣を固めていったものと思われ、この周恩来葬儀のとき以来、鄧小平は公衆の面前から姿を消したのである。

● 大衆感情と走資派批判

このような注目すべき状況のなかで、はやくも一月十九日夜には、葬儀後、全国各地から天安門広場の人民英雄記念碑に陸続と捧げられた亡き周恩来への花輪が撤去されるといふ事件が起っている。のちの天安門事件のブローグとも思われるこの事件は、党中央が周恩来の死を悼む大衆の感情の発露をさえ抑制しようとしていたことを明白に示したのであった。この出来事に関連するものとして

綱」といった綱領とプログラムをもって、右からの巻きかえしをはかったのだとされている。

ところで、「昨年七、八、九月の三ヶ月間」といえば、われわれが外部世界で看取しえた事実としてまず第一に、八月一日の建軍節前後の一連の旧幹部の大量復活があり、とくに羅瑞卿(元人民解放軍総参謀長)の復活はその象徴であった。第二に注目すべき事実は、昨夏の杭州事件であり、中国社会の末端における工場労働者の賃上げ要求に発端したこのストライキ事件は「走資派」の経済政策ときわめて深い相関性をもつ事件だったと思われる。

第三は、昨夏以来の「水滸伝」批判である。「水滸伝」批判は「現代の宋江」としての鄧小平への批判であると同時に、一昨年の「批林批孔」運動以来の周恩来批判をこそ含意していたように私は考えてきた。

● 周恩来の死、鄧小平の消失

こうした状況を経て「走資派」批判へと接続するのであるが、しかし昨年後半以来の鄧小平の活躍はきわだつていた。中国社会の深層に流れる潮流を鄧小平はしっかりと掌握していたのかもしれない。

は、党中央が周恩来の死を必要以上に悼むことを禁ずる通達を一月下旬に発したとの有力な情報もあった。

こうした情報を裏付けるかのように、「人民日報」一月中旬以降は、二月五日まで世界各国組織から寄せられた弔電や弔文を紙面に掲載したほかには、周恩来を追悼する記事をまったく掲載せず、周恩来ほどの指導者の死にたいしてはきわめて異常な措置としか思えなかった。そのうえ、周恩来死後初めて発行された「紅旗」第二号や『学習と批判』第二号(いずれも文革派の影響力の強い雑誌である)は、周恩来の死にまったく言及してはいないばかりか、かえって明らかに周恩来批判を意図した

「折衷主義」(中国語の「折中主義」が、「中庸」とともに周恩来路線を指す)とは明白である。批判の論文を掲載したのである。「人民日報」は紀平署名の『紅旗』第二号論文「折衷主義こそ修正主義である」を二月五日に大きく転載した。

党中央が周恩来の死にたいして、きわめて冷やかであることが中国民衆には次第に明らかになっていった。このような党中央の文革派の態度こそ、民衆の大きな不安と流言蜚語

このようなとき、本年一月八日の周恩来総理の死が訪れた。そして、世紀の宰相の死をどのようなかたちで見送るのかという問題は、冠婚葬祭に敏感な中国人の意識構造において、きわめて刺戟的な重要問題であったと思われる。はたして一月十五日の追悼式(葬儀)には、ただひとり鄧小平が全参加者を代表して弔辞を読み、党内序列第二位の王洪文をしりぞけて筆頭副総理としての地位と國務院総理の継承権を内外に示したのであった。

この鄧小平の弔辞は、きわめて含意の多い、挑戟的なものであった。鄧小平はその弔辞の前半において、中国革命の過程における周恩来の功績を詳細にたどりながらも、後半の建国後の部分に関しては抽象的な表現に終始し、とくに文化大革命の箇所などはきわめて一般的な言及をおこなっただけであった。

昨年十二月に死去した康生・党政政治局常務委員にたいしては、葉劍英が「先日、「康生同志は、…毛主席の革命路線の立場に立ち、旗幟を鮮明にし、…一貫して新生勢力と新生事物を熱情をこめて支持した」(傍点引用者)と具体的かつ明白に述べていたのとは著しく対照的であった。しかし鄧小平は、

を誘発したのであろう。やがて一月下旬から二月初旬にかけて開かれたと思われる党中央の重要会議は、それが一部で推測されたように、決裂した三中全会であった可能性もあるが、いずれにせよ、この会議では鄧小平の総理昇格が阻止され、同時に王洪文や張春橋がそのポストにつくこともなく、妥協的な人事として華国鋒の総理代行が決まり、二月七日には、この人事が外部世界に伝えられたのであった。

この間の事情については、「清明節の前後、彼らはまた、さまざまな反革命の破壊活動に狂奔した。ある者は方々へ出かけて連係行動をとり、鄧小平が「総理になる」ことを要求する手紙を党中央に出す陰謀をこらした」(前掲「人民日報」社説「天安門広場事件はなにを物語っているか?」)という中国の公式論調もその輪郭を示唆している。こうした背景のなかで、二月六日付「人民日報」評論員論文「プロレタリア文化大革命の継続と深化」によって、本格的な「走資派」批判の火ぶたが切られたのであった。

だが「走資派」批判は、清華大学や北京大学などの大学キャンパス、「人民日報」など

のマス・メディア、大衆生産大隊や大慶油田、軍では瀋陽部隊など、いずれも文革派の拠点ないしはモデル地区で高揚したのみであり、人民解放軍や國務院、科学院など軍人、ビュロクラート、テクノクラートのあいだでの運動の停滞は歴然としていた。「走資派」批判の先駆になったかに伝えられた清華大学においてさえ、周恩来の死の翌日、はやくも鄧小平の後に立って周恩来が傘をさしている漫画が貼り出されたという事実があり、「走資派」批判が周恩来批判を含蓄することは明白であっただけに、「走資派」批判への抵抗は意外に根強かった。

そして、三月中旬以降は、逆に文革派への抵抗が各地で伝えられた。三月二十八日付『人民日報』社説「右からの巻きかえしに反撃し、工業生産を促そう」は、党中央が「走資派」批判への抵抗の根強さと運動の行き詰りを認めたものでもあった。そうした潜在的潮流に支えられて鄧小平は決して「悔い改め」なかったし、一方、三月二十五日に國務院外交部の招きで壁新聞を見学するため清華大学を訪れた北京駐在の外交団は、清華大学の女性有力幹部から「鄧小平打倒は考えている

様の準備がすすんでいた。

四月二日には、すでに数万の民衆が天安門広場が集まり、人民英雄記念碑は花輪と追悼文で埋まり、周恩来の遺影があちこちに掲げられていた。花輪には贈り主が書かれていて、中国科学院の各研究所、國務院第一、第三、第七機械工業部、人民解放軍総参謀部、人民解放軍三〇四医院、北京航空学院などの名前が目立っていた。はやくも四月二日には人民英雄記念碑の最上段に、

紅心已結勝利果

碧血再開革命花

倘若魔怪噴毒火

自有擒妖打鬼人

紅心はすでに勝利の果実を結び
碧血は革命の花を再び開く
もしも悪魔が毒火を噴けば
おのずから妖を擒え鬼を打つ人あらん

という詩がくりつづけられていた。この詩は明らかに「妖」は「姚」つまり姚文元批判を意味しているが、一方では「周総理と人民の心はかたく結ばれている」などの周恩来敬慕

ない」旨の説明を受けている。

清明節を期して

このようなとき、三月末に上海の党機関紙『文匯報』が三月五日と二十五日の論説で周恩来批判をおこなったとして、『文匯報』の黒幕、『中国のフルシチョフ』、『反周の頭目』を批判する激しい動きが南京大学、南京林学院の学生や鉄道員のあいだから起り、文革派にたいするまっごうからの反批判が生じたことは注目すべき出来事であった。この事件は、「階級闘争」という大義名分のもとに政治的な意見表明をつねに抑えられてきた中国民衆

III “大衆反乱”のクライマックス

●“文化の反乱”が始った

朱塗りの天安門城壁の中央には、中華人民共和国の国章とともに毛沢東主席の巨大な天然色の肖像が掲げられている。その天安門の向う正面、広場の中央には、花崗岩でできた巨大な白色の方形の塔がある。人民英雄記念碑である。記念碑の背面には周恩来の文字でアヘン戦争以来の烈士に捧げる言葉が刻まされており、遺骨を国土の山河に撒いて墓もない

のスローガンが林立しはじめたのである。

翌四月三日になると、いよいよ異常な雰囲気になってきた。広場には早朝から深夜まで群集が詰めかけ、長安街には花輪を先頭に隊列を組んで広場へ向うグループがあとをたたなかった。状況の異様さに驚いた党中央は、毛沢東主席の名前で周恩来追悼を禁ずる旨の指示を出したが、時すでに遅く、毛沢東の指示はこうしてはじめて公然と無視されたとの未確認情報もある。その夜、北京の学生たちのなかには、泣きながら周恩来追悼デモをおこなったグループもあった。四月三日の首都の異様な雰囲気、北京の記者団や外交団は色めき立った。

それにしても、広場に貼り出され、掲げられた詩は律詩といふ絶句といふ、いずれも形式がととのった立派なものであり、それらが美事な筆跡で書かれていて、大字報(壁新聞)の悪筆を見慣れていた者にとってはまさに「百花齊放」、中国文化のルネッサンスの感があった。『人民日報』はのちに、天安門事件には「反動的文人」が多数加わったことをしばしば論難したが、多くの知識人の参加なくしてこのような「文化の反乱」はありえなかつた。

のあいだに一つの火を点した。

新しい「流言蜚語」が生まれ、情報が情報を生み、拡大し、再生産しつつ急速に拡散していった。いつしか、故人を弔う四月上旬の清明節に、びたりと照準が合わされつつあった。三月下旬に訪中した九州のある訪中代表団は、天安門にさしかかったバスのなかで中国国際旅行社の工作員から、「四月初めにはここで面白いことがある」と話されたという。

清明節を期しての大きなうねりは、以上のような経緯のうちに発現したのである。

亡き周恩来総理にちなんだ唯一のモニュメントである。

この人民英雄記念碑のまわりには清明節が近づいた三月三十一日から、早くも周恩来への献花が並びはじめた。

四月にはいると、北京の各大学・学院、中学校などで清明節にそなえ、ブラカドヤスローガンを学生たちがつくりだしていたことが確認され、國務院や科学院の各部門でも同ただらう。

●インターが歌われて

こうして迎えた四月四日の清明節。天安門広場が集まった群集は五十万とも百万とも、あるいは延べ百万を越えたとも報せられた。『朝日新聞』の田所特派員電をはじめ、清明節の異様な高揚を示す第一報がわが国の新聞にも載せられた。

人民英雄記念碑のまわりは、何百何千の花輪が積まれ、「妖魔打つべし」の横幕も掲げられたが、集まった民衆に悲愴はなく、むしろ華やいだ雰囲気さえ感じられた。「前線部隊」と書かれた花輪には、「周恩来記念堂」建立のために大衆が自発的にカンパすべきだと書かれていて、新しい紙幣が一枚貼ってあった。

かくて広場のスローガンの大部分は、周恩来を追慕するものであったが、それらのなかには、「周総理を攻撃する者を打倒せよ」、「彼らは一体誰の名をかたって周恩来同志に反対しているのか」といった、周恩来批判への反批判を示すスローガンも目立っていた。こうした状況のなかで群衆が最高潮に達した午前十時半ごろ、一人の若者が人民英雄記

念碑の台座のうえに引き上げられ、人波が大きく揺れた。やがて記念碑に掲げられた周恩来の遺影が、天安門の毛沢東の写真と向かい合った。その瞬間、民衆のあいだからは「インターナショナル」の歌声があがり、「周總理万歳！ 万々歳！」の歓声があがった。「毛沢東の中国」にたいし、「周恩来の中国」がまさにこの瞬間対峙し、『東方紅』や『大海の航海は舵手による』等の毛沢東讃歌を歌うことのみを馴らされてきた民衆は久々にインター（国際労働歌）を唱和し、毛沢東以外にたいしては禁句であつて、死者にたいしては「永垂不朽」とはいつても決して一般には用いない「万歳、万々歳」という声が発せられたのであつた。この瞬間こそ、清明節翼愛のクライマックスであつた。

● 称讃、あてこすり、破壊

だが、清明節の夜から翌五日早朝のあいだに、人民英雄記念碑に捧げられていた幾千の花輪がごとく撤去されてしまった。花輪のなかには「六日まではこのままにしておいてほしい」と書かれたものも多かったのに、官憲によって一斉に撤去されてしまったのである。

こようものなら今日はただで帰さんぞ」といった。
 このような剣幕のなかで、清華大学の学生が「なぜ周総理の悪口をいうのか」と詰問され、血だらけになるまでに殴打され、記念碑のまえであやまらされた、という。こうした勢いに押され、数百人の労働者民兵は人民大会堂を防衛するため、列をつくって大会堂の石段をあがったが、騒擾を起した悪人どもによって阻まれ、いくつかに切り離された。
 そして、人民大会堂の階段では、演説者の一人が毛主席の前々夫人で一九三〇年に殺害された烈士・楊開慧を称え、哀悼したが、この事実、広場には前日から楊開慧追悼の張り紙がひとまわり立っていたことともに、江青夫人にたいする痛烈なあてこすり以外の

五日朝七時頃には、民兵二、三百名と人民警察約百名が約千名の民衆と早くも激しくい争っていた。花輪撤去に怒った民衆は「誰が撤去を命じたのか」、「命令書を見せよ」などと激しく詰め寄り、小ぜりあいがはじまり、民兵の腕章が引きちぎられた。そのような状況のなかで民衆の数はみるみるふくらみ、午前八時頃には数万になった。広場への入場を禁じられた民衆が、警備を突破して流れこんできたのである。そのうちの大きな一群は「中央の同志に訴えよう」と叫んで、人民大会堂におしかけた。
 この午前八時以降、事件が鎮圧される夜九時半までの状況については、事件を報じた『人民日報』労働兵通信員、『人民日報』記者の共同執筆記事「天安門広場の反革命政治事件」（『人民日報』四月八日）が驚くべき詳細さで状況を生き生きと描いている。もとより、この報道は、事件の動きを克明に描きつつも、一方では周恩来礼讃のスローガンが氾濫し、他方では姚文元、江青らの文革派への批判が横溢したという事件の基本的性格については、まったく言及していない。したがって、事件を再構成するためには『人民日報』報道

なものでもない。同時に、中国ではタブーであつたはずの毛沢東の女性関係への最初の言及であり、民衆はそのタブーの真の意味を知りつくしていたことを物語っている。
 十一時五分、多数の人間が天安門広場東側の歴史博物館につめかけた。：：一群の悪人どもは広場東南端の、時計台近くにある解放军営舎を囲み、入口を破壊し、屋内に押し入った。：：十二時になろうとするころ、騒擾を起したある者は「首都人民総理追悼委員会」なるものの成立を宣言した。：：十二時三十分、天安門広場に勤務する警備戦士たちは、解放军の営舎を守るため、隊伍を組んで営舎に向つた。とき、乗用車「上海」号がひっくりかえされ、ワトーという喚声とともに黒煙と炎があがった。驚いて駆けつけた消防隊

に依拠しながら（以下、『人民日報』報道部分）「」で示す、当日の民衆の声や動きを多面的に補うことによって事件の全体を肉付けしなければならぬ。
 朝の八時前後、市公安局の放送宣伝カーが一台破壊され、ひっくりかえされ、車体とスピーカーをめちゃめちゃにされた。興奮した民衆のなかから学生らしい一団が人民英雄記念碑の台座に駆け昇り、周恩来の遺影をつり下げると、このときにも大きな歓声とインターの合唱が起つた。九時すぎ、一万人余りが人民大会堂の表玄関に集まつた。そして、『人民日報』自身が「広場の群衆はもつとも多いときで十万人近くに達した」と述べて、この騒擾がいかに大規模なものであつたかを認めている。
 「騒擾を起した暴徒は、「殺してしまえ、殺してしまえ」と叫んだ。警備の戦士が一人とめに出てなにかいうと、とたんに騒擾を起した悪人どもによって襟章、帽章をひきちぎられ、衣服をスタズタに裂かれ、顔じゅう血だらけになるほどなぐられた。この悪人どもは狂乱して、「この場を抑えられる人間などいるのか。中央から誰が来てもだめだ。出て

員は血が出るまでなぐられ、消防車一台が打ちこわされた。十二時四十五分、応援にかけつけた一隊の人民警察も、追い払われ、阻止されたりした。
 午後になると、反革命分子の破壊活動はさらに狂暴化した。：：公安機關の自動車あわせて四台を焼き払つた。この間、北京第七十三中学の生徒たちが新たに周総理への花輪をささげ、また別のグループは「敬愛する周総理、天安門前でこのような騒ぎを起し、あなたの邪魔をしてごめんなさい」、「真のマルクス・レーニン主義を骨抜きにしようとしてハサミを振り回すやからをわれわれは粉砕する」と書いた紙を記念碑に貼りつけた（『朝日新聞』田所特派員）。
 三時半頃から営舎への投石がはじまり、つ

〔平凡社選書46〕
安藤昌益

安永寿延著

江戸時代中期にあつて、封建制を、善良な農民を搾取し、人間性を歪める悪徳の体制と断じ、孔子、孟子、諸子百家以来当時までの儒者を、総じて支配者の専断を合理化するための虚偽の教説の御用学者であると決めつけた異色の思想家安藤昌益の思索の母胎をさぐる。 ■980円

細胞から大宇宙へ
 メッセージはバツハ

ルイス・トマス著
 橋口稔・石川統訳

アメリカの第一線医学者による、人間と自然、科学と生命、生物学と死、健康と言語などに関するベストセラー科学随筆。もし巨大な目が地球を眺めれば、地球も一つの細胞と映じるかもしれない。宇宙全体さえ、その外から見れば……。75年度全米図書賞に輝く。 ■1200円

いに五時前後には、この悪人どもは営舎に突入し、二階の窓ガラスとドアをたたきこわし、屋内のものをことごとく略奪した。現場は黒煙がもうもうとあがり、反革命のわめきで埋めつくされた。彼らは営舎の窓ガラスをほとんどたたきこわしたあとこの営舎に火を放った。悪人どもは、得意になつて「これこそ大衆の力だ」といった。彼らは、「鄧小平が中央の活動を主宰したことで、闘争は決定的な勝利をおさめた」「全国人民は、大いに喜んでゐる」とデタラメをいった。彼らはまた「最近のいわゆる反右傾闘争は、ひとにぎりの野心家の巻き返しの活動である」と悪辣な攻撃、中傷をおこなつた。

●秦始皇の社会は返らず……

こうした驚天動地の騒乱にわけられたのちの夕刻六時半、ようやく北京市革命委員会主任・吳徳が「今日、天安門広場で破壊攪乱をはかり、反革命的破壊活動をおこなう悪人がいる。革命の大衆は彼らにまどわされずにただちに広場から離れるべきである」という呼びかけを、マイクで繰り返しておこなつたのであった。

に検挙がおこなわれた。

九時半、首都労働者民兵数万人は、北京市革命委員会の命令を受け、人民警察、警備戦士と協力し、果敢な措置をとり、プロレタリア階級独裁をおこなつた。

そのときの模様は『人民文学』誌第三号でこう描写されている。「反撃戦が一斉に開始された！ 四月五日夜九時半、命令一下、天安門広場が一斉に光り照らされ白昼のように明るくなった。英雄的な首都工人民兵は手に手に自衛の武器を持ち、山をも海をもおしおけるばかりの勢いで、足下をほとばしる激流のように、両側から広場へおどり出て、すみやかにひとにぎりの反革命分子を周囲からとりかこんでしまった」(陶嘉善・高興烈「英雄的な首都工人民兵、前進」)。

こうして一斉検挙がおこなわれ、この日の騒乱はおわつた。

だが、このような厳しい一斉検挙にもかかわらず、翌六日にも数万の民衆が広場に集まり、ジープが壊されたりした。この日も吳徳の放送が流されたのである。広場や長安街は、翌々七日になって二十メートル間隔の兵士による取締り体制のもとでようやく平靜化

だが、なおひとにぎりの反革命分子はかたくなに反抗をつづけ、人民英雄記念碑のまわりで反動的な詩を張り出した。それらの詩のなかの一つは、次のようなものであった。

欲悲閨鬼叫

我哭豺狼笑

灑血祭雄傑

揚眉劍出鞘

中国已不是過去の中国

人民也不是愚不可及

秦皇的封建社会已一去不返了

我們信仰馬列主義

讓那些閹割馬列主義的秀才們

見鬼去罷！

我們要的是真正的馬列主義。

為了真正的馬列主義

我們不怕拋頭灑血

四個現代化日

我們一定設酒重祭。

悲しみにくるとき鬼は叫び

われ哭くに狼どもは笑う

血を灑ぎて雄傑を祭る

したのである。

●切迫した時間のなかで

七日夜八時、北京放送は華国鋒を党中央委第一副主席兼國務院総理に任命し、鄧小平を党内外の職務から解任する中央委員会決議を「政治局は一致して可決」ということで発表した。深夜二時すぎ、この決議を支持するドラや太鼓のデモがはやくも長安街を通りすぎ、翌八日からは全国各地で党中央支持の「官製デモ」がおこなわれたが、いずれも盛りあがりには欠け、「しらけ」のムードはぬぐえなかった。

今回の事件は、事件直後の四月十日付『人民日報』社説「偉大な勝利」がいうように、「第一にそれは首都でおきた。第二にそれは天安門でおきた。第三に、……なんとすさまじい反革命の氣勢ではないか！」という総括につきる。

だが、これら「反革命分子」は、決して鄧小平擁護のスローガンをかかげたわけではなく、そのスローガンの多くは周恩来擁護であり、毛沢東側近体制への批判と抵抗であった。その批判の基調は、昨七四年十一月、広州市北京路に貼り出されて注目を集めた紅衛

眉を揚ぐれば劍鞘を出つ。

中国は過ぎし中国にあらず

人民も愚かきわまれるものにあらず

秦始皇の封建社会は再び返らず

われらはマルクス・レーニン主義を信奉す

マルクス・レーニン主義を骨抜きにする

秀才どもよ

引きさかれ！

われらが求むるは眞のマルクス・レーニン

主義なり。

眞のマルクス・レーニン主義のために

われらは首をはねられ血を灑すとも辭さず

四つの現代化なりし日には

われら酒を供えて祭らん

*「四つの現代化」とは、周恩来総理が昨年一月の第四期全国人民代表大会で彼の政治的遺言であるかのよう強調し、また、鄧小平が「走資派」の政策基調にしようとしたとして激しく非難された「工業、農業、国防、科学技術の四つの現代化」を指す。

以上のような動乱ののち、夜九時半を期して一挙に数万の民兵、人民警察、北京衛戍区と八三四一部隊の警備兵士が動員され、一斉

兵出身の三名の若者、李正天、陳一陽、黃希哲の「李一哲」名による共同大字報「社会主义の『民主』と『法制』について」と同様の、毛沢東家長体制への批判であり、君臣父子の党への批判であった。

そして、広場に集まった大衆はインテリ、労働者、若者、学生たちであり、もとよりそこには、紅衛兵出身の極左派(とくに「五・一六兵団くすれ」)不満分子も混在していたであろう。

事件がエスカレートし、行きつくところまで行って暴動にまでいたつた背景には、花輪撤去という明白なきっかけが必要であったように、ある種の挑発や作戦が介在していたであろうことも十分に推測できるが、ともかく清明節に広場へ集まった百万の北京市民は決して付和雷同した者でも烏合の衆でもなく、黙々と集つて一つの明白な意思表示をおこなおうという自覚的な政治感覚をもつた北京市民であった。この市民の自発的な政治参加も「反革命の陰謀」だと思ふべきをえないうところに、毛沢東以後への切迫した時間を経過しつつある今日の中国の悲劇がある、といつたらいいすぎであろうか。